

36度のバス停

fujisyun

バスが停車して数分経っている。

ここは両側を畑に囲まれた片側一車線のゆるやかなカーブで、朝方はよく渋滞を起こすのであった。

そう決めつけ仮眠を決め込んでいた訳だが、バスの中がいつもより騒がしくなっていた。何人かがバスを降りてしきりに何か喚いている。

腰を浮かし乗車口の方を覗きこんでみると、男が倒れていた。老人のようで、呼びかけにも応じない。

今日は猛暑日だった。

そういえば連日ニュースで、今日は熱中症で何人が搬送されたとかやっていたことを思い出した。

ここのバス停には日陰になるものは何もない。運行本数も一時間に2、3本である。長い待ち時間にこの猛暑にでもやられてしまったのだろうか。

「救急車を呼んでくれ、たぶん熱中症だ」と乗客の男が叫んだ。

運転手は無線で何かを報告している。

ドアを開けっ放しにしているせいかだんだんと車内の温度が上がってきた。私は運悪く日が差しってくる側の椅子に座ってしまったため、シャツの下まで汗ばんでいる。

バスの車内がだんだん騒がしくなる。それは温度に対する不平だったり、学校に間に合うかどうかの焦燥であるようだった。

男は倒れている。

バスの後ろに車の列が出来上がっていた。ここは抜け道のない、しかし交通量の多い道である。直接の原因は私ではないが、何かこのバスに乗っていることが後ろめたい気がしてきた。

それにしてもバスは動かない。気性の荒い中年の乗客が運転手に問いただしたところによると、救急車もこの渋滞に巻き込まれ現場に来れないとのことだった。

救急隊は徒歩でくるらしい、だがそれにしても時間はかかってしまう、と。

バスも男を置き去りにして出発するわけにはいかないのだろう。

乗客は各々携帯で到着が遅れる旨を誰かに報告している。私も一報入れておいたほうがいいだろう。今日は大事な初顔合わせである。

そのことを今更ながら思い出して胸の奥がむかむかした。

「遅延だと？そんなことが言い訳になると思っているのか」

「ですが」

「お前今日の顔合わせがどんな意味を持っているのかわかっているのか？念願の公共施設の案件だぞ。いいからさっさと来い」

「バスがうんともすんとも動かないんです、熱中症で倒れた人がいまして。駅までは歩けば1時間かかります」

しばしの沈黙。そうでもしないと電話機を叩きつけてしまいそうな、そんな雰囲気だった。

「私の担当分を後に回して下さい、申し訳ありません。準備は出来てますから。」

「...わかった」

乱暴に電話は切られた。

車内が焦燥と苛立ちに満ちていた。上がり続ける温度と、無為に過ぎていく時間がそれに拍車をかける。

暑いと不平を漏らす者、一限目に間に合わないと嘆く者、私と同じような境遇の者、この状況自体に腹を立てる者。

男は倒れている。

乗客は皆、腹を立てていた。私も正直苛立ちを感じ始めていた。あれほど入念に準備をしてきたのにこんな形で裏切られるとは。

この状況を作りだした男を責めるの憚られる、彼に罪はないだろう。しかし、自分の状況は刻一刻と悪くなっている。

車内に男を気遣う者はもう一人もいなかったように思えた。

男に怒りをぶつけて罪悪感を感じないように、男の安否より自分の境遇を気にしていることを自覚しないために、男は公然と無視されているような気がした。

そういえば上司も男の安否については一言も触れなかった。

ここから会社までかかる時間を計算する。ちらちら男に対する暴言が頭の片隅に浮かぶ、それを今後の段取りを考えることで押しやる。男のことを考えてはいけない。

なかなか簡単には「私はそういう人間なのだ」とは承服したくはない。このバスに乗っている者も皆、私と同じようなことを考えているのではないだろうか。

男は倒れている。

救急車のサイレンが遠くから聞こえた。